

# 弟子訓練の“カルト化”をいかに防ぐか

(2013年2月「第2回主の弟子訓練コンベンション( @洞爺湖)」での講義)

昨年(2012年)の11月、Calセミナー(弟子訓練指導者セミナー)が韓国で行われまして、私は日本の先生方のための通訳者として呼んで頂いたのですが、今そちらにいらっしゃる姜明玉伝道師先生と、ちょっとお話しする時間があったのです。その時に私が質問を一つ頂きました。「日本での弟子訓練ムーブメントはどうですか?この間随分困難がありましたけれど、少しはそれが沈静化されて回復しつつありますか?」と、姜明玉先生は私にお尋ねになられたのであります。皆様でしたら、この問いにどのようにお答えになられるでしょうか。私はその時、私自身の正直な感じとして、こういうふうに申し上げました。「まだまだです。この件はそんなに簡単なことではありません。時間がかかります」と。恐らく、この場にいらっしゃる多くの先生方が同じ感想を持っていらっしゃるのではないのでしょうか。

先ほども本多泰治先生が、「弟子訓練の働きをやっていく時に、いろいろな反発とか反対とかやりにくさというのがあった」というお話をして下さいました。それは仰る通り、昔からあったものですがけれども、その上にこの数年間、ご承知の通りのあの事件(註:小牧者訓練会の指導者によるセクハラなどの不祥事を指す。2016年6月15日に最高裁によって、原告=被害者たちの訴えを認める判決が確定済)によって、更に大変な困難を皆が経験しました。大変な痛みを経験しました。けれども、その中でも敢えてイエス様の御心を握っていらっしゃる先生方が、ここにこうして集っておられて、私もその交わりに入れて頂いていることを感謝しているのですが、この時間は、タイトルをご覧になってお分かりの通り、相当敏感な問題、それでも扱わざるを得ない問題を扱うこととなります。

私自身も祈る心で準備してここに立っているのですけれども、タイトルに「カルト化」という嬉しくない言葉が使われております。最近によく使われる言葉であります。特にこの数年間、弟子訓練をめぐってよく使われる言葉です。私たちが今の状況下でこの弟子訓練の働きを敢えて進めていく上で、やはり真摯に考えざるを得ない宿題として、私たちに与えられている。そのことを、皆でこの時間、祈りつつ共に考えたいという意図で、このタイトルをつけたのであります。

この「カルト」という言葉は、定義せよと言われれば、実は少し難しいです。海外でこの言葉を同じように使っても、あまり通用しません。特にヨーロッパでは、正統的キリスト教から逸脱したグループのことを「セクト」と呼びます。しかしながら日本において、この「カルト」という言葉は、最近実によく使われるようになりました。しかしながら、その厳密な定義は意外に難しい。それでも、私が敢えて定義を試みるとしたら、こういうことになるのではないのでしょうか。

「支配的な、また操縦的な関係の中で、人間性を破壊していくような組織」。これをカル

トと呼びたい。そして、そのようなカルト組織の中で起こっている、人間性を破壊していく関係のことを、カルト的な関係というふう呼びたいと思います。

必ずしも宗教組織に限らず、人間性がそのようなカルト的な関係によって破壊されていくということが、世にはあります。精神的にまた肉体的に、あるいはまた経済的に、酷い時には性的に、人間性がいろいろと蝕まれていくということが、罪によって墮落した関係の中で起こり得ます。

最近、日本の社会のニュースを見ますと、スポーツ界でこれがたくさん起こっていることが問題になっていますね。特に柔道界において内部告発が盛んになされているようですが、実は他のスポーツにもたくさんあるはずで。露見しているのは氷山の一角でしょう。実はアメリカでは、日本よりもっと早くこのことが問題視され始めておりまして、もう何十年も前から、これは大変なアメリカの社会問題になっています。そういう支配的な操縦的な関係の中で人間性が破壊されていくカルト的な関係というのは、宗教界だけではなく、会社などでも起きがちなのですが、それがまあアメリカのことですから、訴訟になるということが、随分頻繁に起こっているようでありまして。専門家によれば、最もこの問題が深刻なのが、スポーツ界と、それからもう一つが宗教界であるということだそう。スポーツにせよ宗教にせよ、ある目的を集団で激しく追求していく組織の中で、そういった関係がたくさん起こりがちであるということですね。しかしながら、例えば会社などにおいては、寧ろこういった問題が起こらないように様々な予防線が張られるようになった。そういう予防策は寧ろ、世の会社においては発達しているのだけれども、スポーツ界や宗教界においては事が隠蔽されがちで、問題は深刻であるということが、世の専門家たちによって言われていますね。そういう状況が、まず日本の社会の中にありました。そしてそのような文脈の中で、2008年にあの不祥事が露見したということでもあります。

私自身は、ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、実はあの大きな問題を起こした教会の、核心メンバーとして、かつて働いておりました。2008年にあの騒ぎが起こる以前に、私なりに問題を感じて自発的に脱会して（2004年秋）、その直後に韓国のサラン教会に拾って頂いたわけなのですが、あの脱会から今日（2013年）まで10年近くの日々の中で、私は実は、自分が働いたところだけでなく、たくさんのカルト的な教会で苦しむ多くの信徒たちから、多くの悩みの相談を受けました。なぜそういう巡り合わせになったのか分かりませんが、韓国のサラン教会にいる間も、日本に帰ってきて東京で開拓を始めてからも、本当にたくさん、その種の相談を受けました。数えてみたら、計100人くらいにはなるのではないかと思います。私が牧会上の責任を直接追わない、よその教会の信徒さんまで、私に相談しに来られることがたくさんありましたから、あの教会ではこういう問題が、この教会ではこういう問題が、と実にたくさんのお話を聴かされました。

そのような相談を多く受けている者として、教会のカルト化の問題は、実に深刻だと思っています。人を癒やしてイエス様の似姿に育てていかななくてはいけない教会が、人間の

内なる神の似姿をぶち壊して廃人のようにしてしまうような戦慄すべきケースが、本当にたくさんあります。しかし、その被害者の方々と接しながら、私がいつも感じてきたこと、今も感じていることは、そのように教会をカルト化させる悪の種を、仮に「カルト化のパン種」と呼ぶとして、それは、他ならぬ私の中にもあるということです。何かの弾みでそうした悪が、私から出ることもあり得る。いやもしかしたら、もう少しずつ出てしまっている可能性も否定できない、ということでもあります。

そういうわけですから、今から私が話す内容は、どこか特定の教会を批判することが目的ではありません。私たち自身が、罪の性質を持ちながらも、主の教会に仕える使命を頂いた者として、つまり、「カルト化のパン種」は間違いなく自分の中にあるにも関わらず、健康な教会形成をしたいという志を持った者として、いやそのように主から召命を頂いている者として、いかにこの問題を考えるべきか、という話をしたいのであります。

あまり耳に心地よい話ではありませんけれども、今の日本のキリスト教界においては、この問題は必ず引き受けて考えざるを得ないテーマです。私自身が、多くの被害者たちの苦しみを数年間聞いて、彼らと一緒に悩んできたこと、また自分の牧会現場においてもそういうパン種が自分から出ないように、私なりに日々主に頼りつつ努力していることを、皆様方とこの時間分かち合わせて頂きたい。そういう趣旨で話をさせていただきます。

## 1. **Spiritual abuse(霊的虐待)が弟子訓練の名前で起きてしまう時の症状**

**Spiritual abuse** という言葉は、パスカル・ズィヴィー先生たちがお書きになった名著(『信仰という名の虐待』いのちのことばブックレット)で有名になった言葉です。同じブックレットには『教会がカルト化するとき』(ウィリアム・ウッド)という名著もありますが、もしもまだこれらをご覧になってない方がいらっしゃれば、是非お読みになられることをお勧めいたします。日本で弟子訓練牧会をなさろうという方には、これらは必読書ではないかと私は思っています。

海外では、ずいぶん前から、この **Spiritual abuse** という言葉は使われているようです。これをパスカル先生は、「信仰による虐待」と訳されました。「信仰という名による虐待」とはつまり、「信仰によって生きていきましょう、信仰を成長させましょう」と聖徒たちに呼びかけながら、実際には霊的な **abuse** つまり虐待を、聖徒たちに対してしていることであります。これが正に、カルト的な教会形成の根底にある問題なのでありますが、それがこともあろうに、弟子訓練の名前で起こるケースがあるわけです。

それを考察するために、まず、それが実際に起こっている時の症状を、最初に述べたいと思います。その後、それではそういう症状が出てくる霊的土壌は何なのかということを考えるつもりであります。

ではまず、**Spiritual abuse** が弟子訓練の名前で起きてしまう時の症状について述べます。

四つの症状を今から申し上げたいと思います。これらは、私がたくさんの実例に触れながら感じとり、認識している症状であります。

#### ① 信徒の心が恐れや罪責感で支配されている。

最初からそういう状態になるということはないのです。クリスチャンでなかった方が、カルト的な性質を持っている教会に触れる時、最初からいきなり恐れや罪責感で支配されることはありません。最初は、ラブシャワーです。ラブボミングとも言いますが、愛の爆発的なシャワーを与えるわけですが、世の中では通常経験しないような大歓迎を与えて、ああここには本当に愛があるというふうに思わせるのです。そして感動を与える。そして、しばらくはそういう蜜月的な時期が続くのです。そしてその雰囲気の中で教会は福音を語り、そしてイエス様の御名によって洗礼を授けて、その人を共同体の一員にします。そしてそこから本格的に御言葉を教え始めるわけなのですが、ある時点から、その教えの課程でこういうことを言い始めるのです。「指導者の言うことに聞き従うことが神様の御心ですよ。指導者への従順こそが神様に対する従順ですよ」。

実際に被害を受けた方々の話を聞くと、最初のうち非常に驚くような愛の歓迎を受けて、そのうちに、教会が要求する学びに自分が加わるたびにちやほやされて、いつの間にかその教会が要求するラインに乗せられていた、ということを知ります。自分も、真理を知りたいと言うより、ちやほやされる感覚が嬉しくてそれに載っていた。つまり、教会との間で依存関係になっていたと。そういうことを告白して下さいます。

心に傷を持つ人を相手にカウンセリングをする時、その人がカウンセラーに対して依存的になる時期が来るというのは、専門家の間では常識です。心に傷持つノンクリスチャンに対して教会が福音を伝える時、一時的にそのような症状を呈することがあるのは事実です。しかし、その時期が来たなら、カウンセラーはクライアントに対して、そのような依存状態がなるべく早く終わるように仕向けるべきだというのが、カウンセリングや牧会の常識です。それはカウンセラーや牧会者の、倫理のイロハでしょうが、カルト的な教会は、そこを敢えて依存させます。そしてこう教えます。「あなたは成長過程でいろいろ葛藤はするかもしれないけれども、あなたが救われるための霊的指導者は、私なのだから、神がそのようにあなたの指導者として私を立てられるのだから、そしてこの教会を立てられるのだから、その言うことに従うことこそが御心だよ」と。被害者たちはよく言います。ある時から、教会の自分に対する対し方が変わり始めた。最初はすごいラブシャワーで大きな感動を与えてくれたその教会が、あるいは指導者が、ある時から威圧的な言葉を言い始めるのだと。例えば「あなたは神に対する誠実さがない」とか、「あなたは共同体の一致を壊す非常に危ない人です」とか、「あなたのそういう生き様は神に喜ばれていません」とか。こ

ういう脅かすような言い方をし始めるのですね。

そして「あなたは霊の子供でまだ何も分からないのだから、私の言うことを聞きなさい」というような言葉を言い始める。「ああそうか、私は子供なんだ、この先生の言うことを聞かなきゃいけないのだ」と思わせて、つまり依存をさせて、そして、先生の言うことに従いたくないと思ってしまうことは間違いなのだと罪責感を持たせて縛り付けて、それによって依存がどんどん深まるような養育の仕方をする。そして葛藤の様子が見られるならば、「聖霊が導いて下さったのにこの教会からあなたが離れていくな、今後の人生であなたはもう祝福は受けられませんよ」というような、脅かすようなメッセージも語られるのです。そして、実際に離れていった人々に対しては、「あの人は本当に神様を悲しませてしまって、もう祝福は受けられませんね。実に愚かな選択をしましたね」というような、そういう語り方をする。ですからナイーブな聖徒たちは、「ああ自分もこの教会を離れたらこういうふうに言われてしまうのだ」というような、恐れを持ちます。

それからもうひとつは、罪責感ですね。その先生になかなか従えない、その先生の要求に従えない、そういう心を覚えてしまうことに、罪責感を感じるように仕向けます。そういう葛藤を抱えながら一所懸命に弟子訓練を受け続けている。正に、恐れと罪責感で支配されている状況ですが、これがまず、**Spiritual abuse** が結構進んでいる時の症状の一つなのであります。

繰り返し申し上げますが、こういう症状は、私たちの牧会する教会にも起こり得るのです。どこか特定の教会を批判して申し上げているのではなくて、私たちの弟子訓練が間違ふとこういうふうになってしまうこともあり得るという話をしているのがあります。

## ② 聖徒たちは自発性が軽んじられ、指導者の目を気にして生きている

これは①で述べた内容と密接に関係があります。被害者たちの話を聞くと、彼らはよくこういう言い方をいたします。「いつでも神様と私の間にその先生がいた」と。例えば、朝ディポジションをする時も、神様の御声を聴くというよりは、どういう黙想をしてどういう適用をしてどういう選択をしたらその先生が喜んで下さるだろう、よしと言って下さるだろう、それをいつも習慣的に黙想していたと告白します。つまり、聖霊様が何を願われるかではなくて、先生は何を願われるかを黙想している。だから、「いつでも先生が神様と自分の間にいる」ということです。

他にも、人生のいろいろなことを決める時に、その先生の思いは何だろうかと無意識に考えてしまう。勿論、信頼する先生に相談して意見を伺うこと自体はおかしくありませんが、決定に際して先生の意向が異常に重要なファクターになってしまうケースは問題です。例えば、実際に私が聞いた話ですけども、「あなたは信仰生活をせっかく始めた

のだから、こんなところに住んでいないでもっと教会の近くに住みなさい」というようなことを言われるのです。それは勿論、聖徒が教会の近くに住むことは良いことかも知れない。しかし問題は、その聖徒がその引っ越しを決める時に、先生の目を見ながら決めるということなのです。

「家賃の節約のためにあなたは〇〇さんと一緒に住みなさいよ」などと、牧師に言われるケースもあるようです。確かに、信仰者同士が共同体生活をするのが有益な場合もあるでしょう。しかし問題は、それを決める時にも、先生から言われたからそういうふうにするということです。

そして、ひとたびその流れを受け容れて、共同体生活など始めると、そこから尋常でない生活が、徐々にエスカレートするのです。それも、信仰の名において。例えばですけど、早天礼拝が強制されるというようなことを、実際に聞きました。決められた時間になって起きないと、リーダー格の者に布団を引っ剥がされるというようなことが起こるのです。

他にも、弟子訓練を受けながら、宿題が出たり奉仕も課せられたりするわけですけど、どれもこれも恵まれるから喜んでやるというのではなくて、宿題をやって行かないと先生に何か言われてしまうから、奉仕もちゃんとやらないと誰かリーダーから電話がかかってきているいろいろ言われてしまうから、それで結局指導者の目を気にしながら、そういった訓練やら奉仕生活を頑張って続けている。これは、**Spiritual abuse** が結構進んでいる症状だと見て間違いないです。

そしてその症状に伴って、まあカルト的教会の特徴と言えますけれど、教会生活そのものが非常に多忙になります。そしていつも何かに追われて奉仕をやらなければならない、訓練を受けなければならない、その負担感の中で慢性的疲労状態だったというようなことを、被害者たちはよく訴えます。睡眠も当然足りなくなります。わざと指導者が彼らを睡眠不足にしているのではないかと思うぐらいに、過酷なスケジュールを課しているケースもあります。当然、判断力などは衰えます。

そして、そんな中で時には指導者への従順がおおっぴらにテストされることがあります。どこそこに引っ越しなさい、これこれの働きをなさい、すぐに従うかどうかこれはあなたへのテストです、というようなことがおおっぴらに言われて、信徒の側では祈りながら葛藤しますけれど、その葛藤を乗り越えて従順を選び取ったならば称賛され、あたかも本人が自発的にそれを選び取ったかのような雰囲気になりますけれども、実際には巧みに強制されているという状態ですね。これは典型的なマインドコントロールですけども、信徒たちが弟子訓練を受けながら、仮に指導者の目を気にしながら生きる状態になっているなら、既にそれはマインドコントロールの世界に入っているということです。繰り返し申しますが、これはどこか特定の教会の批判をして申し上げているのではなく、私たちの弟子訓練牧会が間違えるとそういうふうになり得る可能性が十分にあるということをお話ししています。

### ③ 信徒が「その教会の目的のための」人材に育てられている。

教会は信徒を靈的に養育する責任があるわけですが、その信徒個人に向かう神様の素晴らしい計画や祝福の実現は無意識の裡に軽んじられて、寧ろ、教会の活動に有為な人材になるために育てられている、ということが起きているケースがあります。つまり、教会に役立つ人間としてその信徒は育てられており、信徒本人もそれを主の御心として受け入れてしまっている状態ですが、これはもはや、カルト化が進んでしまっている症状だと言うべきです。

例えば、実際に被害者から聞いた話ですけれども、とにかく伝道して教勢を増やそうということが、教会の上の方の人から盛んに言われて、信徒がそのために動員される時に、「失われた人を主の元に連れてくることは主の最高の喜びである」という美辞麗句のもとで駆り立てられることがあります。礼拝に新しい人を最低〇〇人は連れてきなさいと、威圧的にノルマが課せられるようなケースですね。そしてその目標が達せられなかったら、立たせられて、真剣さが足りないなどと叱責される。そのような目に遭うのは怖いので、もう礼拝の日が近づいてくると必死になって誰かを連れてこようとして頑張る。私にその話をして下さった方は言っていました。「まるで会社の営業活動をやっているみたいでした」と。教会の指導者たちのそのような姿勢を、神様の御心に沿ったものだ、信徒の側でも信じて受け入れてしまっているケースは、少なくないようです。

献金についても同様です。献金というものは、自発性がとても大事であるはずですが、何かの理由で十分に捧げられなかった時などに、指導者から人格を否定するような暴言を浴びせられるというような話も、たくさん聞いております

また、若い信徒であれば、進路に関して、また恋愛や結婚に関して、プライベートな決定をたくさんいたしますが、その際に指導者が、過度にそれに介入するケースもあります。ちょっとそういう就職はどうなのかとか、そういう人と付き合ったらまずいんじゃないとか、勿論指導者として意見は言って良いと思いますが、指導者が信徒の人生の祝福を願ってというより、教会の活動に少しでも有利になるようにということを考えてそういうことを言っている場合は問題です。

例えば、「春休みなのでちょっと帰省します」とか、「夏休みなので旅行に行ってきます」とか、そういう話を信徒がする時に、「ちょっとあなた、今は教会が大変なのだからそんなことはやめてもっと奉仕しなさい」などと言ったりするケースもあるようです。つまり、本来個人が自由に決めていい領域にまで、指導者が過度に介入するのです。

そして信徒の側はそのような指導をどう感じているのかと言えば、イエス様の弟子になるということは、自分の持っていた夢の追求はできないということなのだと感じているのです。そういう個人的な夢を追求することは主の弟子の道に反することなのだと、半ば自分に言い聞かせながら、そのような葛藤をしてしまうことに対しても罪責感を持ち

ながら教会生活をしているのです。

そのような症状が昂じていくと、教会の指導者が信徒の心の中で、実の父母の位置を奪うようなことまで起きたりします。信徒と父母の心理的関係を意図的に引き離して、教会の指導者自らがその役割に成り代わるのですね。例えば「今ちょっと私の両親が私の顔を見たがっているので帰省しようと思うのです」などと信徒が言うと、「父母よりも主を愛しないと弟子ではないと、御言葉に書いてあるでしょう」などと、聖句まで引用して人心操作をするのです。

そしてそのうちに信徒の側に不満が鬱積して、指導者に対して不満そうな言葉を言ったりすると、その時によく引用されるのが、サウル王に対して徹底的に従ったダビデ、サウル王を殺す機会があったのに殺さなかった、あのダビデに関する御言葉です。そして「神様からの油注ぎを受けている権威には従わなければいけません」などと言い聞かせると、信徒も純真なのでそれを受け容れてしまう。そして結果的に、教会の活動に少しでも有為な人材となるという目的に、自分の人生を捧げてしまうのです。もうここまでくると、相当カルト化の症状は進んでいると言うべきでしょう。

それから、私有財産を持つことにも制限が加えられるケースもあります。例えば「弟子訓練を私から受けるつもりなら、まずあなたの全貯金を私に預けなさい。それができるかどうかはまずテストです」などと言われて、純真な信徒が何百万という大金を、これは教会のためなのだからと自分に言い聞かせて「先生に預けて」しまい、結局は返して貰うこともできなかったという、信じがたいような実話を私は知っています。

あるいは「〇〇さんは私たちの教会にとって非常に有害な人ですから連絡を取ってはいいけません」などという命令を、指導者が下すケースもあります。情報遮断というのは、独裁者が基本的に使う統治手段でしょうが、それを教会の指導者が「教会のために」という理由で平気で行使し、信徒の側でも「先生が仰るなら本当に〇〇さんは教会にとって有害な人に違いない」と思い込み、多少は葛藤しながら渋々かもしれないが、その命令に服従しているということがあるのです。これは「教会のため」という指導者の鶴の一声を、信徒が受け容れる精神状態になっているという意味で、この三番目の症状が相当進んでしまっている状態であります。

#### ④ 組織にがんじがらめにされて、そこを疑い、出る力がもうない

これはもう相当深刻な状態です。しかし本人は、何か非常におかしいと、心の底の方では感じているのです。イエス様を信じるということはこういうことなのか？と、深いところでは葛藤を覚えてはいるのです。そして、カルト化した教会の特徴と言って良いでしょうけれども、そのような精神状態の中で、本当の人格的成長はもはや起こっていないのです。本当の喜びもありません。疲れ切っています。そして無力感を覚えつつ、昔の子供の頃の幸せだった思い出からも断ち切られていくような寂しさを感じています。



これからもう一生こういう生活なのかというような、恐怖感を感じていたりもします。けれども一方では、「いやいや私はこういう肉的な考えをするからいけないのだ。神様がお立てになった指導者に従えていない私は、このままだと呪われてしまって、教会にとっても悪い存在になってしまう。もっと気持ちをしっかりもって頑張ろう」というような思考をしていたりもします。つまり、教会の指導に葛藤を覚える、そのこと自体に罪責感を覚える、いやそれは神様に立てられた指導者に従っていないからなのだと自分に言い聞かせる、すると教会の指導に葛藤を覚える、というスパイラルが起きているのです。指導者に従うしか道がない、でも心から従えない、それは信仰が足りないからだ、従おう、でも心から従えない、それは信仰が足りないからだ…正にがんじがらめ状態です。そうなるともう、クラシック音楽を聴くとか映画を見るとか、そういう普通の趣味に時間やお金を使うことにすら罪責感を感じたりします。そして、常識的な思考がもはやできなくなってしまうのです。

例えば、経済的にも、私たちは社会生活を送る国民として、税金とか国民年金とか保険料とかを払わなければいけないのですけれども、こういったカルト化した教会の特徴は、多くの信徒たちが経済的にも破綻して、そういうものを払えなくなっているということです。元々やっていた仕事を、献身という美辞麗句によって辞めさせられることもありますから。信徒たちは本当に貧しく暮らしているのですけれども、「これも主のためだから、御国のためだから、十字架を背負って頑張ろう」という思考で耐えているケースが少なくないのです。

そしてもう一つ、こういう教会はピラミッド的な権力構造を持つのが特徴なのですが、その中で、トップの主任牧師から非常な信認を得ている中間指導者が、やはり威圧的なリーダーシップを揮っているケースもあります。つまり、下っ端の方の信徒からすると、教会のトップの主任牧師の先生は雲の上の存在で、あまり話をする機会もないですけれども、日常的に直接的に触れ合う中間指導者が、主任牧師の権威の体現者として、自分に対して強い圧力を加えてくるのです。そしてその中間指導者は、いろいろな意味で、自分よりも遥かに、主任牧師から優遇されている。例えば、財政的にも相当な援助を、その中間指導者は貰っていたりする。なぜそこまでの厚遇をその人は受けられるのか、客観的な基準は良く分からないのですけれども、とにかく厚遇されている。しかし、そういう理不尽に耐えて、その中間指導者の下で一生懸命頑張っていると、時々自分もそのピラミッド構造の中で、一段上に上げて貰えたりすることがあるわけです。それでまた、そういう昇進を目指して更に頑張る日々が続く。何かがおかしいなという感覚は常にあるのですけれども、日が経つほどにがんじがらめになって、そこから出なければならぬとは考えられなくなるのです。

これは私自身も身に覚えがあるのですけれども、そういうカルト化した教会は、日本の平均的教会よりは人もたくさん集まりますし、礼拝も通常の伝統的なスタイルとは違って元気一杯にやっていたりもしますし、洗礼を受ける人も結構多かったですから、

「私たちの教会は、いろいろ苦しいことはあるけれども、それは普通の教会より祝福されているからそうなのよ。うちの教会の先生は普通の先生よりもよっぽど強い油注ぎがあるのだから」などと、信徒同士で語り合ったりします。つまり、自分たちの教会はよその一般的教会よりも祝福されているという思い込みを持っているというのが、そのような教会の特徴の一つだと言えます。そこに身を置くうちに、いつの間にかそのように思い込まれる力が働いているのでありましょう。例えば外部からその教会に客観的な批判がなされる時なども、「これは神様の御心を行なっているがゆえの迫害なのよ」と上の人から教えられたり、信徒同士でもそのように語り合ったりするのです。酷いケースでは、教会が法律を守らなかったりすることに対しても、沈黙したり正当化したりするケースもあるようです。

実際に私がつぶさに被害を直接聞いたあるケースでは、弟子訓練を受けている信徒が、「取り扱い」という名前で、牧師先生から心身ともにボコボコにされるということが、常習的になされていました。そして、その「取り扱い」がなされる時間というのは、他の弟子訓練生たちもそれを目の前で見るのだそうです。見せしめですね。そしてそのうちに、「お前も一緒に殴れ！」と牧師先生に強制されたりもしたようです。つまり、そのような「取り扱い」を黙って見ている、もしくは加担させられるという形で、牧師の spiritual abuse に信徒も協力しているというケースは、他にもかなりあるようです。

こういった教会に数か月もしくは数年身を置いた人は、首尾よく脱会できたとしても、トラウマに苦しみます。せっかく恵みを受けてイエス様を信じたのに、もう教会の「教」の字を見ても身体が震えてしまう、そういう方たちがたくさんいるのです。その治癒は容易ではありません。多くの神の子たちをそんな状態に陥れてしまうのが、Spiritual abuse というものの恐ろしさであり、罪深さであります。

## **2. Spiritual abuse(霊的虐待)を起こしてしまう霊的土壌**

教会の中で、考えられないようなパワーハラスメントやセクシャルハラスメントが発覚する時、私は具体的事例と接しながらつくづく悟ったのですが、それらの露見した不祥事は、いつだって氷山の一角に過ぎません。本当の問題は寧ろ、それらの不祥事の温床となっている霊的土壌です。土壌こそが本当の問題です。深刻に汚染された土壌がまずあって、それが実際の不祥事を通してちょっとばかり露見しているというのが実態です。

それで、健康な弟子訓練牧会を志す牧師としては、自分の牧会の霊的土壌を如何にしてそのような汚染から守るかというのが、重大な関心事にならざるを得ません。私の考えでは、Spiritual abuse が非常に起こりやすい霊的土壌として、三つの要素を挙げられると思います。これからその三つを述べてまいります。

### **① トップダウン式のリーダーシップ**

故玉漢欽牧師の弟子訓練の特徴は、徹底的な帰納法的聖書勉強です。つまり、少人数で座って、指導者は質問を投げかけるのが仕事であって、一方的にぐいぐいと引っ張ることはしません。導く牧師も一緒に神様の御言葉の前に跪き、一緒に御言葉を実生活に適用し、一緒に悔い改めをしながら成長していく期間を、十分に持ち、リーダーの短期急造は決してしないということ。これが故玉漢欽牧師に私たちが教わった弟子訓練のエッセンスでありますけれども、弟子訓練を標榜する某教会においては、教材は故玉漢欽牧師のものを使いながらも、何十人もの訓練生をいっぺんに集わせて、予備校の短期集中講座の如くに、トップダウン式に学ばせるというようなことをしています。その受講期間中というのは(数日から数週間、長いと数か月)、夜も結構遅くまで講義が続くようで、訓練生はものすごく忙しい思いをするわけですが、そのような注入式弟子訓練に耐えぬいた人々は、早速リーダーとかサブリーダーとして立てられて、伝道に駆り立てられます。そのようにして教会の活動に忠実な働き人を急造することを、そういう教会では弟子訓練と唱えるわけですが、これは故玉漢欽牧師が一人の信徒リーダーを立てるのに、弟子訓練が始まってからでも最低二年間は時間をかけていたのとは、かなり違う姿勢だと言わざるを得ません。

恐らく、そういうトップダウン式のリーダーシップを揮う牧師には、自分にはそれだけたくさん弟子を短期間に輩出できる能力がある、という思い込みがあるのでしょうか。それ自体が的外れであることは言うまでもありませんけれども、もう一つ、そのようなトップダウン式のリーダーシップの、もっと重大な過ちは、ミニストリーの成功自体を価値として追求しているということです。つまり、信徒一人一人の内なるイエス様の似姿の回復を如何に全うするかということではなくて、教会がいかにかミニストリーを成功させるかを目的にしまっているのです。教会のミニストリーに都合が良い人間を早くたくさん作ろうとする思考の根底には、他人を自分の目的のために利用しようとする心が間違いなくあります。勿論、これは特定の教会を非難するために申し上げているのではなく、この私自身を含めて、どんな牧師も、主の十字架の前に謙遜でなければ、いつでもそういう罪深い心を自己正当化しながら弟子訓練をしてしまう可能性がある、ということを上申しているわけです。

トップダウン式リーダーシップが、誤った弟子訓練の霊的土壌であるということに関連して、もうひとつ追加して申し上げておきたいことがあります。それは、弟子訓練を行なうと言いながら、教会内神学校を作るケースが、日本では散見いたしますが、これは非常に問題があるということです。

教会内神学校とは何かと言えば、教団などに認可されている一般の神学校ではなく、教会の枠内で作る神学校のことです。聖霊の恵みを強く受けて、将来は教職者になってフルタイムで献身して働きたいという信徒が起こる場合、教団立とかあるいは超教派の、一般の神学校に送るのが通常でしょうが、そういうところにその信徒を送ることを敢えてせず

に、教会内に造ってしまった神学校で学ばせているケースが、結構あるのです。「日本の一般の神学校は知識偏重で霊的訓練がないので、行っても有害無益だ」などということを経験理由にして、信徒たちをそちらに仕向けるわけですが、例えば、それまで携わっていた職業を放棄してその教会内神学校に入ったり、大学院で学者になるつもりで勉強していた人が、それをやめてその神学校に入ったりすると、もう拍手喝采されて、教会では英雄になるわけです。

しかし、この教会内神学校というのは、卒業するとどうなるかと言うと、その教会内の働き人、スタッフになるのが関の山です。まあうまくいくと副牧師先生になれますが、主任牧師よりも偉くなることだけは絶対にありません。それでも、葛藤多いカルト的弟子訓練のスパイラルにおいては、一種の特例的な出世コースなのです。それでも、どんなに頑張っても優秀な成績を収めても、せいぜい主任牧師先生の側近にしかたれないという意味では、非常に閉鎖的な支配体制です。

教団その他が経営する一般の神学校とは、実は、神様が召しておられる貴重な献身者たちを、牧師たちが私有化するのを防ぐという、非常に大切な機能も持っているものでしょう。母教会との間にあったであろう様々な人間的しがらみから、一度その献身者を自由にしてやり、別の様々な環境から来た多くの仲間たちと数年間みっちり交わりつつ、互いに影響を与え合いながら、自分に向かう主の召しをじっくりと自由に黙想する期間を持たせる。これは、教職者候補生たちに対する、とても賢明な教育システムです。しかしながら、その存在価値を初めから否定し、そこに背を向けさせ、「私が直接教えるこの神学校こそが最高なのだ」という思い込みを、貴重な献身者たちに刷り込むというのは、神様の御心に対する重大な反逆だと私は思います。少なくとも、この教会内神学校というシステムを持っている教会は、トップダウン的なリーダーシップが既に幅を聞かせている可能性が高いと言わねばなりません。教会によっては、同じ教会内神学校の中に、フルタイム献身者向けのコースと、そうでない一般信徒向けのコースを分けているところなどもあるようですが、その場合も含めて、これは **Spiritual abuse** が極めて生まれやすい霊的土壌だと言えます。

またそれと関連して、そういう教育システムを持っている教会によく見られるのですが、ある教会が枝教会を次々と生み、それぞれに一応担当者を置くものの、実際はセンターチャーチの主任牧師が全てを主管している、というような形態も要注意です。故玉漢欽牧師は、自分のもとで暫く働いた副牧師が開拓に出たりする時、財政面でも人材面でも惜しげなく支援をしていましたが、その後も上下関係が続いて指示を受けるということは絶対にありませんでした。神の国の同労者としてのフラットな友好関係が続くばかりです。しかしながら、枝教会がセンターチャーチに主管される形態だと、全てのミニストリーはその最も偉い先生の目の色を常に伺いながら行わなければなりません。これもまた、トップダウン式のリーダーシップの産物であり、その教会の霊的土壌は **Spiritual abuse** を生みやすいものであると言って間違いありません。実際、私はそのような事例をたくさん見てき

ました。

## ② 指導者は信徒より神様に近い関係にあるという思い込み。

故玉漢欽牧師は生前強調なさっていましたけれども、弟子訓練というものを行なうのには本来、重要な前提があるのです。それは何かと云えば、教職者も一般信徒も、神様の御前で身分は同じである、という認識です。本来、教職者でない信者という意味での「平信徒」という言葉は、聖書にはない、ということも、故玉漢欽牧師は強調なさっていました。牧師もまた信徒なのだ。ただ、牧師と言う職分のユニークさは、牧師以外の専門職を持った信徒たちが、それぞれの分野で“王のような祭司”として輝いて生きることができるように教え助けることが仕事であるということであり、神の国の主人公はあくまでも信徒である。牧師は彼らに仕えることで謝儀を頂くという意味で、職分は彼らと異なるが、身分はあくまでも彼らと同じである。これが弟子訓練を始める上での絶対的な前提だということは、本当にどれほど強調してもし過ぎではないでしょう。

けれども、この前提を無視して、建前では万人祭司主義を唱えるとしても、実際には心の中では、やはり彼らと私とは身分が違うのだと牧師自らが思っているケースが、少なくないのです。おおっぴらには言わないかもしれないですけども、心の中では、「信徒はやっぱり信徒でしかないのだ。神のしもべとしての自分は、やはり彼らとは別格なのだ」という思い込みが牧師の中にある時に、例えばどういう言葉遣いが出てくるかというと、「あなたは主が私に（私たちに）贈ってくれた魂です」などと、こういう言い方を平気でするのです。そして、その信徒の人生を巧妙に束縛します。そのような操縦的な言葉を言っても自分は許されると、その牧師自身が思い込んでいるのです。

主を畏れる牧師なら、その点に関するチャレンジや誘惑は、日々感じて戦っていることでしょう。ある信徒に対して熱心に弟子訓練をやって、主の弟子として非常に美しく変わって立派なリーダーに育った信徒を見ながら、ああいよいよこれからだな、この人と共に働く中でどんなに素晴らしい御業を主はなさるだろう、と思っている矢先に、転勤しますとか、結婚して遠くに行きますとか、本国で就職が決まって帰国しますとか、そういうことは多々あり得ます。私も結構経験しています。正直、悲しく思ったり寂しく思ったりする気持ちはあります。けれども、そういうことを繰り返し経験しながら、ある時から私は悟りました。弟子訓練をやる牧師の前提として、やっぱりその信徒と一緒にミニストリーをやって一緒に実を刈り取ることは嬉しいに決まっていますけれど、ある信徒に対して弟子訓練をさせて頂けるということは、その人の人生の限られた大切な一時期に、牧師として霊的に関わるのが、神様によって許されたただ、と考えるようになりました。神様はその人の人生の一時期、私を通して、その人の成長のために恵みを注がれるかも知れないけれども、いつか時が来れば、その人は必ず自分から離れていくものなのだ。そのことを、その信徒と関わる最初の時から思っておかなければい

けない。そういうチャレンジを、私も牧会しながら、最近も受けています。

「あなたは主が私に（私たちに）送ってくれた魂だ」というような言い方を、牧師がする時というのは、間違いなく、自分は牧師だからそういう言い方が許されると思っているのです。そういうケースでは、大体、財政運営に関しても、その牧師は不透明なことをしている可能性が高いです。つまり、牧師だから、堅い規則などには縛られずに、主のために柔軟に振る舞っても構わないと、このように思い込んでいる牧師を、日本で何人も見たことがあります。牧師は客観的な規則に縛られなくてよく、牧師は誰に対しても報告義務がない。教会内の人事なども牧師がほしいままに決めて、その決定に不服な者は問題児扱いする。そういうケースを、私も直接目撃しました。私がある時、副牧師の立場で「そういう人事の決め方はおかしい。決定に関する客観的な基準を、ちゃんと示して下さい」と言ったら、非常に不愉快そうな顔をして「基準？基準は私の中にある」と言い放った主任牧師を知っています。つまり、自分は油注がれた霊的指導者であり、下々の者よりも神様に近い関係にあるのだから、そういうふうには振る舞うことが許されると、自ら本気で思い込んでいるのです。これは、**Spiritual abuse** が起こりやすい霊的土壌だと言って間違いありません。

### ③ 牧師自身の人格的二重性

カルト的教会の被害者たちから、良くこういうことを聞きます。「最初は教会が非常に愛に満ち溢れたところだと思いました。でも、少しずつ奥に入っていけばいくほど、次第に縛られて、やがて気づいたら恐ろしい日々が始まっていたのです」。

つまり、そういう教会は、霊的な二重性を持っているということです。それは、牧師が持っている人格的二重性の反映でしょう。

勿論、この私も、自分自身がそうならないことを、日々主の十字架の前で祈らなければならぬ者であります。二重性というのは、例えば、私が講壇では立派なメッセージをしても、実生活では私が一緒に暮らしている妻を毎日痛めつけていたりとか、子供を毎日痛めつけていたりとか、そういう現実があるなら、それは私自身の人格に深刻な二重性があるということです。牧師がそういう二重性を悔い改めないまま牧会していると、その教会にも同じような二重性が生まれてくる土壌になるのです。

二重性を悔い改めるといえるのは、決して容易なことではありません。例えば、牧師自身が劣等感を癒やされていないことも、そのような二重性が発動する土壌になり得ます。早くミニストリーを成功させて、その劣等感をミニストリーの成功で埋め合わせをしようという心理が、そこから無意識の裡に働く可能性があります。

また、昨夜の集会で李壽求先生(この講義をした 2013 年当時、札幌国際キリスト教会牧師でいらっしやって、現在は韓国に戻って日本福音宣教会代表をなさっておられる)も、祈りを導きながら語っておられましたが、私たち牧師の得意技の一つが、霊的な「見せかけ」

であります。実際は情緒不安定でどうしようもない者なのに、実際以上に自分を霊的に健康に見せかける。そうすると、牧会そのものが、パフォーマンスになり、演技になります。問題がなくて元気一杯であるかのように装っていたと思ったら、ある時問題が露見すると突然異様に謙遜になって、「もう私は主の恵みなしでは生きていけない罪深い者です」とか、「皆さんが知っているよりもっとたくさんの方が私にはあるのです。いつだって主の恵みに寄り頼んで歩んでいるのです」などと言って、急に謝罪のパフォーマンスを始めたりいたします。でもその特徴は、その謝罪が真の被害者たちには全然届かない、パフォーマンスとしての謝罪、保身のための見せかけであるということです。先程まで謝っていたと思ったら、「主のしもべである私がこれだけ謝っているのに、それを赦さないあなたたちが悪い。あなたは福音が全然分かっていない」というような言葉を、いきなり居丈高に口にしたりもします。これは指導者自身の二重性でしょう。

そのような二重性が牧師の中で清められていない時、どういうことが起こるかと言えば、信徒がもはや共同体の中で本音を言えなくなるということが起こります。私も、信徒たちが本音を言っているかどうかをなるべく確認しながら牧会しようとしていますが、そうしながら痛感していることは、牧師である私が肉的になると彼らは本音を言えなくなるという法則がありますね。

極めて深刻なのは、彼らがもはやとうとう本音を言えなくなっているのに、牧師である私自身はその現実に対して無自覚であるという事態でしょう。信徒たちの霊的状态は既に深刻なのに、牧師自身はそれに無自覚無頓着のまま、まあそこそこの牧会をやっているような錯覚に陥っていることがあり得ます。これは本当に恐ろしいことですが、そういう状態にある牧師は、何かの契機にそれを指摘されると、物凄い自己防衛反応を示したりします。激昂したり不貞腐れたり、誰かに責任転嫁したり。既にたくさんの方々がボロボロになっているのに拘らず、別の人の責任にしてしまうのです。あの人が悪いから、この人が悪いからと、誰かを責めずにはられません。牧師がそういう状態であれば、その二重性は、教会のあり方そのものに反映するでしょう。そして、信徒であれ家族であれ、そのような牧師の近くにいる人ほど、深く傷つくということが起こります。これこそが、Spiritual abuse を惹き起こす霊的土壌なのであります。

### **3. 故玉漢欽牧師声明文(2009年1月26日付)が私たちに与える教訓**

さて、深刻な話をずっとしてまいりましたが、それでは私たちはどうすべきなのかということ、これから考えてまいりたいと思います。故玉漢欽牧師のこの声明文は、それを論じるために引用させて頂こうと思って、準備してまいりました。

この声明文が出た時の背景については、皆様に今更くどくど申し上げなくても良かろうと思いますが、私は、故玉漢欽牧師がこれを書かれた前後に、その近くにおいて、そのお顔の表情や、その時発しておられた言葉などを、直接見て聞いた者として、皆様に申し上げ

たいと日頃から思っていることがあります。まず、声明文の2ページ目の下のあたりをお読み下さいませか。

...この事件の望ましい解決のために、先日私が東京に派遣したサラン教会のリーダーたちから、小牧者訓練会に関わって来られた日本の先生方の多くが、傷ついた被害者たちを今、私心なしに守り、癒そうとしておられると伺い、その御姿はまことに尊い牧者らしい姿だと思いました。これから、私たちサラン教会もそれらの先生方と行動を共にさせて頂きたいと、心から願うものです。姉妹たちの名誉と心身の健康の回復のために、既に献身的に努力しておられる日本の牧師様方のリーダーシップと一緒に、私たちとしてもできる限りの支援をさせて頂きたいと願っています。...

2009年1月末の段階で故玉漢欽牧師がこういう言葉を発しておられたのだということ、皆さん、思い出して下さいと思います。その次のページの上の方もご覧下さい。

...大変心が痛むことには、日本で弟子訓練を標榜している牧師・宣教師たちの中で、卞牧師だけでなく、他にも何人かの不心得者が、真の弟子訓練牧会とは程遠い、誤った方法で教会形成をしており、それが日本における弟子訓練の評判を、著しく下げているという情報にも、現在接しています。主イエスに従って「仕えるしもべ」になるべき弟子訓練指導者が、威圧的なリーダーシップで人間の王国を築いてしまうというのは、絶対にあってはならないことですが、恐らく私の良く知らないところで、それら誤った指導者の横暴によって苦しんでいる日本の信徒たちや、目立たぬところで彼ら被害者たちのケアに当たっておられる真実な牧会者たちが、かなりおられるのだと思われまます。...

私がこの場でこの声明文に言及させて頂く理由は、ただ一つであります。それは、あの時の故玉漢欽牧師の表情を、私は忘れられないのです。

実は玉先生は、あの事件が露見した時に、なかなかそれが事実だということをお信じになりませんでした。この声明文を書かれる直前までお信じにならなかったのです。それで、ある時玉先生は、当時あの教会の日本語礼拝部担当牧師だった私を呼び出したのです。それは、私を叱るためでした。「お前は一体何故、あの宣教師に対してそんなに敵対して振る舞うのか。この教会の副牧師でありながらそのように振る舞うのは分際を超えている」という意味のことを、呼び出した私に対して、最初は厳しくおっしゃいました。つまり、卞宣教師の言い分の方を、あの時点ではまだ信じておられたのですね。もっとも、実際には背後で「坂本牧師の話をちゃんと聴いてやって下さい」と、故玉漢欽牧師に言っ取りなして下さる方々が、当時の国際弟子訓練院の中に何人もおられたようで、そのことには感謝しているのですが、ともあれ、私をお呼び出しになった時点でも故玉漢欽牧師はまだ、あの事件があそこまで深刻だとは信じてはおられませんでした。



しかしながら私が、「玉先生、違うんです、聴いて下さい」と言って、懇々と事態の深刻さをご説明した時、玉先生の認識がパッと変わった瞬間を、私は覚えているのです。その場ですぐに、玉先生は、私の見ている前で李壽求先生(当時札幌国際キリスト教会牧師、現日本福音宣教会代表)に国際電話をおかけになって、「かくかくしかじかと聞いているが確かなのか」と、確認しておられました。その時の玉先生の深刻な表情や声の調子を、私はよく覚えています。玉先生のその心が、この文面に反映している、ということを申し上げたいのです。

あの時点で故玉漢欽牧師は、健康を相当害しておられて、既に動き回ることはおできにならない状態でしたけれど、これは本当に大変なことが日本で起こっているのだということを確認なさいました。その衝撃と共に、玉先生は、私の受けた印象では、被害者たちのことを考えておられました。玉先生はその直後に、金明皓牧師先生と権宅明長老と私の三人を、調査チームとして日本に送られたのですが、もしもご自分の健康さえ許すなら、被害者たちに直接ご自分でお会いになって話を聴こうとなさりそうな雰囲気でした。今でも、仮に故玉漢欽牧師がご健在でこの弟子訓練コンベンションの場に来られているとすれば、例えば私の顔をご覧になるやいなや、「被害者の〇〇姉妹らは今どうしている？〇〇兄弟らは今どんなふうに過ごしている？」とお尋ねになられることでしょうか。私が見た故玉漢欽牧師という方は、そういう方です。「日本の目立たないところで、これら被害者たちのケアに当たっておられる真実な牧会者たちが、かなりおられるのだと思われます」というような文面に、故玉漢欽牧師のそういう人柄を読み取ることができます。

つまり、重大問題が発覚して、サラン教会までも非難に曝されたあの状況下で、故玉漢欽牧師は、被害者たちの存在を念頭に置いておられたのです。私は、これはとても大切なことだと思います。私たち自身が、健全な弟子訓練牧会を志すのであれば、問題が起きた時に、教会やそのミニストリーをどうやって守ろうかという思考をするのではなく、実際に傷んでいる被害者たちのことを考える姿勢を、持てなければなりません。私たちは、そのことを忘れてはならないと思います。

こういうことを強調したい理由を少し述べましょう。皆さんは、例えば仙台にもこれと類似の事件があつて裁判になったことをご存知だと思います(註・仙台地裁は2013年3月に、被告藤本光悦元牧師のパワハラ行為を認め損害賠償を命じる判決を出し、その判決は確定した)。私は成り行き上、あの仙台の事件の被害者の方々とも親しくさせて頂いているのですが、私が彼らに関して気の毒だと感じているのは、卞宣教師の事件に較べて、被害者たちに対して親身になられる牧師先生方が、あの地域に少なかったということです。皆無ではなかったのですが、かなり少なかったので、彼ら傷んだ被害者たちは、問題が取り沙汰されるようになってからも、十数年放置されたのです。彼らが私に涙ながらに訴えることは、様々な牧師先生方に被害を訴えて相談しても「藤本先生は用いられているからねえ」などと答えられて、きちんと対処して頂けなかったということです。つまり、伝道

の実が日本の平均的教会よりも多かったり、弟子訓練関連のセミナーなどを派手に行なったりしているという、外面だけを見て「神様に用いられている牧師だ」と判断し、結果的に不作為の罪を犯すことで、藤本元牧師の自己弁明に加担し、被害者たちを苦しめる側についてしまった牧師たちが、少なくなかったということです。

先程、教会の中で誤った弟子訓練が行われる時、**Spiritual abuse** を目の前にしても沈黙することで、信徒が牧師の悪に加担してしまうことがあるのだということを申しましたが、牧師もまた、自分では **Spiritual abuse** をしていないつもりでも、他所の教会の牧師の **Spiritual abuse** を見聞きした時に、不作為の罪を犯すことでそれに加担するということがあり得るのです。ですから、問題に出くわした時に、傷んだ被害者たちの癒しを真っ先に考えられるかということが、私たちにとって大事な試金石でしょう。これが故玉漢欽牧師の言われているところの「牧者の心」を持つということだと思います。私たちが弟子訓練を志す牧師として、何よりもこの心を持つことが大切だということ。それが、故玉漢欽牧師が今なお、この声明文を通して私たちに語っておられるメッセージだと、私は思います。

私自身は、自分が昔五年間も副牧師として身を置いた教会ですから当たり前ですが、国際福音キリスト教会で苦しんだ信徒たちの悩みを、聴き続けています。その中には、東京サラン教会とは関係のない信徒たちもたくさんいます。彼ら一人ひとりの苦しみは、この場で語れるものではありませんが、実に大変なものがあるのです。はっきりと申し上げられることは、事件が 2008 年に発覚して 5 年が経つ今（註・この講義をした当時は 2013 年 2 月）でも、彼らの苦しみは現在進行形で続いているということです。私が姜明玉先生に対して、「日本においてあの事件の余波は簡単に消えません」と申し上げたのには、そういう意味もあるのです。彼らの苦しみは、まだまだ続いています。そのような彼らの存在を、例えばこのコンベンションがこれから数年後、仮に盛況になって今よりもっとたくさんの方々がここに集うとしても、私たちは決して片時も忘れないということが大事だと思います。そうでなければ、私たちはあの出来事から何を学んだのかということになるでしょう。

今も続いている被害者たちの苦しみを、きちんと覚えることはできているか。彼らの目線に立った振る舞いができているか。それが、健康な弟子訓練牧会を志す牧師としての、私たちの試金石だ。それこそが故玉漢欽牧師の声明文が与えて下さっている教訓であろうと、私は思っております。

#### **4. 希望はどこにあるのか ～絶えざる自己吟味と連帯を通して～**

さて結論を申し上げます。日本において、健全な弟子訓練牧会を志す牧師たちの希望がどこにあるかと言えば、今この場に、このように謙遜な姿勢で、一つの目的意識を持って集っておられる、この先生方の存在と、その交わり自体が、希望だろうと私は思います。

弟子訓練というものが、イエス様が命じられた牧会の本質であるのは確かですが、これ

に一種の危険性があるのは否定できません。人間に過ぎない牧師が、弟子訓練の名前で他人の人生に深く関わっていく時に、今日私が長々と申し上げたような問題を起こして、取り返しがつかないような傷を与えてしまう危険性は、確かにあるのです。しかし、それでもなお、弟子訓練をしなければ牧会をしたことにならないと信じ、敢えてその道を私たちが行くのであれば、私たちに必要なのは、自分をチェックして生きることです。時には、自分に苦言を呈してくれる同労者の存在は、実にありがたいものです。私の場合は韓国のサラン教会に置いて頂いたことによって、心から尊敬する先輩牧師たちを、そこで得ました。彼らが今後、私を叱ってくれると思います。しかし、まだまだ、自分にはそういう交わりが足りないと感じています。日本の立派な先生方にも、交わりは頂いていますが、「札幌五人衆」と言われる先生方の親しい交わりには、非常な羨ましさを覚えます。

私がこの洞爺湖での皆様との交わりを素晴らしいと思うのは、ここには「親分」が一人もいませんね。メイン講師の朴正式牧師先生（韓国仁川恩恵教会）も、この私の講義を含めて、全ての講義をひとつも漏らさず、熱心にメモを取りながら聴いて下さっている。これは本当に素晴らしいことです。こんな素敵でフラットな関係の中で、互いに学びあいながら、互いを建てあげていく。この交わりは、「札幌五人衆」の先生方の交わりが長年かけて基礎を作って下さったと思いますが、ともあれ、その芽がここまで育っていることを、心から感謝いたします。

たくさんの痛みと問題はありますが、それらを背負った上で、なお難しい道を共に歩いていきたいと思いますという意識の中で、それこそ絶えざる自己吟味と連帯の中で、私たち自身がキリストの弟子として、主に導かれる羊として、癒やされつつ成長する道を共に歩いていく時に、その恵みが私たちのそれぞれの牧会現場に、祝福として流れていくのであろうと、私は考えております。ご静聴、ありがとうございました。